

# 火山災害予想区域図 小～中規模噴火の場合

## (火山ハザードマップ) 最近100年間に発生した規模の噴火



**注意点**  
 1) 全ての方向に同時に発生するわけではありません。  
 2) 図の予想範囲は絶対的な範囲ではないため、予想範囲の少し外側でも警戒が必要となります。

**噴火時は危険ですので火口から4キロメートル以内に近づいてはいけません。**  
 噴火していないときでも、指定された登山道以外は立ち入り禁止です。

条件によっては火口から4キロメートルより外側に噴石が飛来したり、火砕流と熱風、火山ガスが到達して被害を受けることもありますので注意してください。

風下側では火口から8キロメートル付近まで小石が飛んできたことがあります。

### 最近100年間の噴火の特徴

浅間山は、最近20～30年間は比較的静かな状態が続いています。しかし、明治時代から昭和30年代にかけて、ひんぱんに噴火を繰り返していました。この時期の噴火では、火山灰や噴石、空振、ときには小規模な火砕流などの現象が発生しました。これらの噴火で亡くなった方は、すべて火口から4キロメートル程度以内の範囲にいた登山者でした。浅間山のこのような過去の噴火の経緯から、下のグラフのように、噴火がひんぱんにおこる時期と静かな時期を繰り返していると考えられます。



浅間山の小規模な噴火の噴煙とともの中規模な火砕流が発生し斜面に沿って流れました。1973(昭和48)年2月6日撮影



### 最近100年間の噴火写真



明治時代に撮影された浅間山の噴火。(小諸市から撮影) 1911(明治44)年5月9日  
 昭和30年代の噴火期から昭和30年代まではこのような噴火がときどき起きていました。1951(昭和26)年12月14日  
 稀な規模噴火による火山灰。車にうっすらと灰が積もりました。火口から東へ約6キロメートルの地点で撮影。1961(平成23)年7月25日  
 1983(昭和58)年4月8日の噴火で火口から発生した直径約10センチメートルの噴石。落下時の衝撃で地面に穴が空きました(湯の平にて撮影)。  
 1973(昭和48)年2月に山頂付近でみられた火砕流。



浅間山噴火 降雨のように火山弾 窓ガラス次々割れる  
 森にも道にも厚い灰  
 1973(昭和48)年2月1日の噴火を伝える新聞記事(朝日新聞) 火口から約7キロメートルの地点で小石が降って被害がでました。



標高メッシュデータおよび衛星画像より作成した浅間山周辺3D CG (Photo:1/30で作成)

**記号の色と意味**

- 想定火口**: 浅間山の山頂火口
- 火山ガス**: 噴煙中にガスが溜まりやすい予想範囲
- 噴石**: 大規模な噴石が飛んでくる予想範囲(4km) 風下側で小石が飛んでくる予想範囲(8km)
- 空振**: 空振による被害を受ける予想範囲(10km)
- 火山灰(降灰)**: 風下側に火山灰が降る
- 降雨時の土石流 融雪型火山泥流**: 降雨時の土石流と融雪時の融雪型火山泥流の発生型
- 火砕流と熱風**: 火口から半径4km以内(熱風はその外側にも広がる)

火山活動に関する情報 気象庁の発表する情報 最新の火山情報及び火山活動度レベルは、気象庁のホームページ <http://www.jma.go.jp/> でご覧いただけます。

気象庁発表の火山情報(平成15年10月23日)より作成

火山情報	火山情報は、気象庁から発表されて、報道機関(テレビ、ラジオ、新聞)やインターネットなどを通じて、住民や観光客の皆さんに伝達されます。
緊急火山情報	生命、身体にかかわる火山活動が発生した場合、あるいはそのおそれがある場合に随時発表
臨時火山情報	火山活動に異常が発生し、注意が必要なときに随時発表
火山観測情報	緊急火山情報、臨時火山情報を補う場合や、火山活動に悪化があった場合などに発表
火山活動解説資料	浅間山の火山活動の状況は、気象庁火山観測・情報センターから毎月「火山活動解説資料」として公表されています。火山活動解説資料は気象庁のホームページでもご覧いただけます。 観光客向けには観光客向けに、火山観測・情報センターが発表する火山情報等の解説や火山防災対策の必要な情報提供も行っています。
火山活動の歴史	火山噴火予知連絡会(事務局:気象庁)では、浅間山の活動を「おおむね15年以内に噴出した火山および現在活動中の火山」として発表しています。この発表をもとに、日本の火山活動度レベルは10段階で発表されています(2003年1月)。
火山活動の今後の展望	さらに、火山噴火予知連絡会では、浅間山について火山活動の分析(ラング分け)を行い、10日間の火山活動をAからCまでの3つのラングに分けています。浅間山は、この中で最も活動度の高いAラングに分類されています(2003年1月)。なお、これらの情報は過去の火山活動などを参考に決められたものです。A～Cのラング分けは噴火への対応を助けるものではありません。

レベル	火山の状態	噴火の形態	過去の事例	この防災マップとの対応
5	活断層で及ぶ大規模噴火が発生した可能性 - 活断層で火山活動は活断層が動いて活断層に連動するよう大規模噴火が発生。 または 上記のような噴火の可能性がある。	山麓まで噴火物が降下、溶岩流の発生、火砕流の発生などの可能性がある。	- 大正、大昭和の大噴火(山麓まで火砕流、岩屑なだれ)	大規模噴火
4	山麓まで及ぶ中～大規模噴火が発生した可能性 - 活断層で噴石が降る。あるいは火砕流または溶岩流など、活断層で連動するよう中～大規模噴火が発生。 または 上記のような噴火の可能性がある。	山頂火口から3km以内、山麓まで噴火物降下、空振の影響の可能性があり、小規模の火砕流もあり得る。	- 1960年9月23日の噴火(火口から8km以上離れた場所に噴石) - 1973年の噴火	
3	山頂火口で中～大規模噴火が発生した可能性 - 中～大規模噴火が発生。 または 空振が頻発したり火砕流・噴石が頻発するなど中～大規模噴火の発生可能性がある。	山頂火口から2～3km程度以内まで、噴石を伴った火砕流や火砕流が降る。	- 1983年4月8日の噴火(空振で山麓のガス等に被害) - 2000年9月、2002年6月の噴火	
2	中～大規模噴火活動 - 噴石がやや多く降ったり、火山性地震が時々発生、噴火が発生するなど火山活動がやや活発である。 火山性ガスの噴出がやや多量噴火(火山灰の降出など)があり得る。	山頂火口付近に噴火の火山性の噴出もあり得る。	- 2002年5月山頂の噴火活動の活発化、火口の温度上昇 - 1960年、2003年の噴火	
1	静穏な火山活動 - 噴石は比較的少なく、火山性地震の頻度が減少するもの。その規模は小さく、火山性噴火の発生も少ない。	噴火の可能性低い	静穏な活動期のほとんど	
0	長期噴火の活動の発現なし - 噴石がなく、火山性地震・噴火もほとんど発生しない。	噴火の可能性なし		

(Aラングに分類されている13火山) 十勝岳、樺山、高岳山、北岳山、伊豆大岳、三石岳、伊豆大岳、三石岳、伊豆大岳、三石岳、伊豆大岳、三石岳、伊豆大岳、三石岳